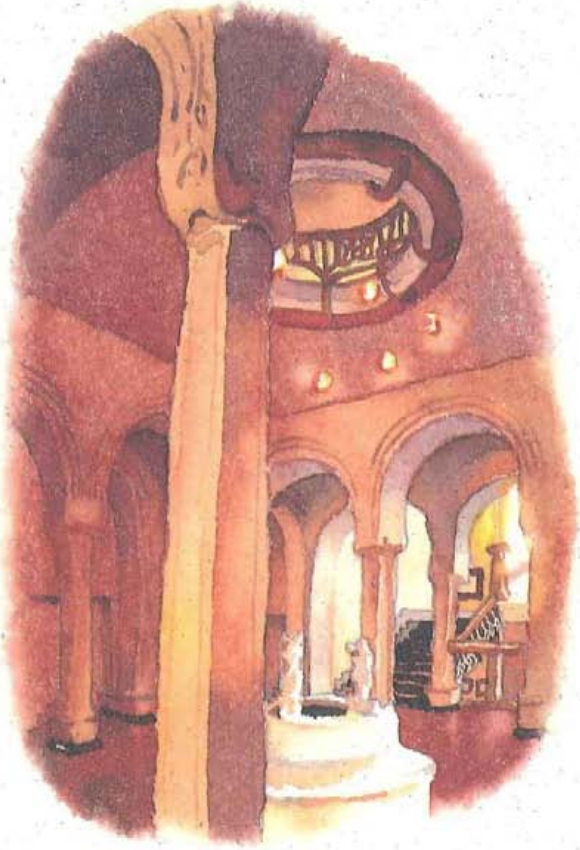
【図説】

近代建築の系譜

日本と西欧の空間表現を読む

大川三雄＋川向正人＋初田亨＋吉田鋼市

彰国社



近代建築の読み方・見方を指南した徹底ガイド.
空間表現の流れをつかめば建築史が楽しくなる.
歴史主義～モダニズム～ポスト・モダン
現代建築を理解するための完全見取図.

◉はじめに——「世界の中の日本」の時代に向けて

世界は、ますますボーダーレス、つまり国境のない時代へと向かっている。情報通信網の発達は、個人のレベルで、地球規模の広がりをもって、瞬時に国際交流を行うことも可能にしている。情報だけではない、モノや人などの国際交流も、国家の枠や制約を飛び越えて、地域、有志グループ、個人の間で多様に展開しつつある。近代とは、まさに「近代国家」なるものを形成し、それをベースにして平和で安定した世界の仕組みをつくろうとした時代であったが、その近代が遠ざかろうとする今、近代がつくり上げた国家像がゆらぐのも当然なのかもしれない。「近代国家」を形成し「近代国家」間で熾烈な争いを繰り広げ、そのために庶民の生活や産業構造などを「近代化」することも正当化されてきたが、このような「近代化」の道を進んでも、平和で安定した世界の実現には至らないことが、そろそろ見えてきた。これこそ、近代という時代が私たちに遺した最大の教訓ではなかったか。本書は、日本を大川と初田、西洋を川向と吉田が担当して計四人で、近代建築の流れをたどり現代建築の行方を展望しようとするものであるが、作業を進めるにあたって共通の時代認識があったとすれば、それは、以上のようなものであった。

この時代認識から、日本近代と西洋近代を一冊の本におさめるという考えが生まれた。過去の回顧と未来への展望、そのいずれにせよ、日本を孤立させず世界の動きのなかに位置づける具体的な一歩にしようという考え方である。というよりも、とりあえず身近な日本と、それを

取り巻く西洋の動きを同一平面に描いて、そのうえで読者に自由に自らの位置を確認し、これから進むべき方向を決めてもらいたいというのが、私たちの願いである。

日本の近代化の歴史は、極論すれば、「西洋に追いつき、追い越せ」と「もはや西洋に学ぶものはない」という二つの立場を、具体例を交えて描けばできあがるようなところがあった。しかし、この二つの立場のいずれに立っても、日本という国家の枠は越えられない。そこに描かれているのは、日本人の一人ひとりが国家と一心同体になって西洋と競争し、勝ち負けに一喜一憂している姿なのである。ここに欠けていたのが、「西洋に、世界に、どう貢献できるか」という日本人の自発的で前向きの姿勢であったことは、もはや指摘に及ぶまい。いや、それよりも何よりも、歴史家の端くれとして懸念することは、この種の近代建築の描き方では、ボーダーレス時代に育ち国家との一体感のない若い世代に、そっぽを向かれ、歴史（学）そのものが崖っぷちに立ってしまうということなのだ。

このような問題意識は、私たち四人だけのものではない。たとえば、鈴木博之ほか監修『建築二〇世紀Ⅰ、Ⅱ』（新建築創刊六五周年記念号／一九九一年一月・六月臨時増刊）は年譜形式をとるものだが、日本近代建築を世界の近代建築の多元的な流れに位置づける大変な労作であった。藤森照信著『日本の近代建築（上、下）』（岩波書店）は、日本という枠を生かしているが、西洋の動きを的確におさえ、世界的視野で日本近代建築の個々の成果を客観的に評価しようという姿勢を感じさせる。また、近代建築が否定し乗り越えるために必ずしも良い意味ではなく「折衷主義」と呼んだ、歴史的な様式形態を復興する一九世紀建築を、近代建築の呪縛が解けた今では、欧米の学界では「歴史主義」と呼ぶのが一般的になっているが、これらの著作は、この「歴史主義」と「折衷主義」の違いに対しても深い理解を示している。

本書では、問題意識だけではなく、現時点での日本と西洋の近代建築史研究の成果をできるだけ生かし共有するように努めた。まず、「近代」の出発点だが、西洋に関しては、近代化と近代国家形成がはじまる啓蒙主義と産業革命あたりに求め、日本に関しては、その一足先に近代化に踏み出した西洋列強の外圧によって長い鎖国の眠りから目覚める一九世紀半ばの開国あたりに求めている。「眠りから覚める」という契機を重視することで「近代」のはじまりが日本と西洋ではほぼ一世紀ずれるとしても、それは致し方ない。あるいはまた、一世紀ほど遅れただけに、日本の近代建築は、駆け足で家族・社会制度や産業構造の近代化を進めながら、主義主張やその表現の追求を行わなければならなかった。それに対して、欧米では、建築家を含む芸術家たちは、国家の枠を越えて自由に行き来し、同じ主義主張の下に協働し、ＣＩＡＭのような国際的な運動体を組織することすらあった。各章題にも表れているように、近代建築で問題になる内容が日本と西洋では微妙に異なっており、本書では、それを同じ問題とか同じ視点で切り揃えることを必ずしも行っていない。だが少なくとも、章ごとに叙述内容を完結させるように努めている。だから、順を追って読むことも、章を選択し自分なりの組み合わせで読むこともできるはずである。執筆者一同、いろいろな読み方を試し、自分なりのブレンドをつくってほしいと願っている。

◉はじめに——3

Part1 日本の近代建築を読む

I 西洋文明との接触
①西洋建築技術との出会い——10
②棟梁・職人の文明開化——16

II 歴史主義の建築に学ぶ
①お雇い外国人の建築——22
②日本人建築家の誕生——28
③新たな立脚点の発見——34
④国民的様式の追求と様式の相対化——40

III 建築創造への挑戦
①自己の発現から建築運動体へ——46
②建築家による職能確立運動——52
③近代都市住宅の成立——56
④都市・街並みの変化——62

IV 歴史主義から近代主義へ
①工学および都市問題への視点——68
②歴史主義の成熟と近代化——74
③モダニズム建築の登場——82
④さまざまなモダニズムの展開——88

V 現代への道程
①小住宅への挑戦——94
②戦後モダニズムの展開——100
③世界の建築に並ぶ——106
④モダニズムを超えて——112

Part2 西欧の近代建築を読む

I 一九世紀の試行錯誤
①鉄とガラスによる新時代の幕開け——120
②歴史主義—様式と主義の意識化——126

II 近代デザインの原点
①アーツ・アンド・クラフツ運動——132
②アール・ヌーヴォー——138
③ウィーン・セセッションと世紀末モダニズム——144
④鉄筋コンクリートの登場と普及——152

III 近代主義の波及効果
①モダニズム建築の成立(1)—ドイツ、オランダ、ロシア——158
②モダニズム建築の成立(2)—フランス、イタリア——166

Part 1

日本の近代建築を読む

③表現主義の建築――172
④有機的建築(1)―アメリカ――180
⑤有機的建築(2)―ヨーロッパ――186
⑥住宅団地の形成と近代の都市づくり――194

Ⅳ 伝統への回帰

①アール・デコによる装飾の復権――200
②大戦間期の復古主義・古典主義――206

Ⅴ 加速度化する潮流

①アメリカのオフィスビル――212
②モダニズムの戦後の展開――218
③新ブルータリズムとハイテク環境建築――224
④構造主義とその展開――230
⑤ポスト近代への新潮流――238

近代建築をより深く理解するための参考文献一覧――248
近代建築史年表――249

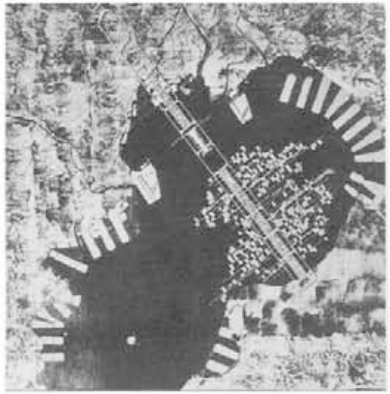
◉あとがき――272

●イラスト／大崎吉之
●装丁／早瀬芳文

＊各項目の本文末尾に記したイニシャルは執筆者を表わす。O(=大川三雄)、K(=川向正人)、H(=初田亨)、Y(=吉田鋼市)のイニシャルで示した。

国立屋内総合競技場・付属体育館◇丹下健三、1964年、東京都渋谷区[7]
動線など機能的な問題とともに、将来の成長、変化に対応できる「開かれた空間」をつくることを試みている。

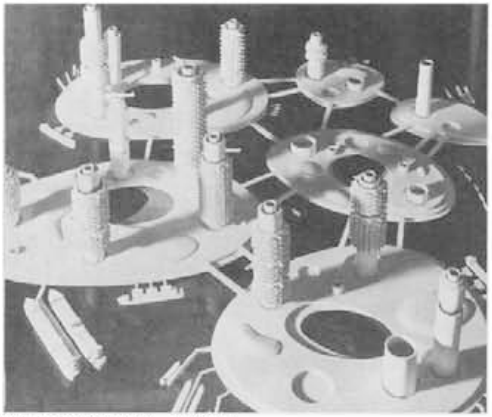
駒沢オリンピック公園◇高山英華＋芦原義信＋村田政真、1964年、東京都世田谷区[8]
バスを降りて中央階段を昇っていく眺めを考慮して、樹木をもたない、ヨーロッパのようなドライ方式の広場をつくっている。



東京計画 1960◇丹下健三研究室、1961年[9]
既存の都市にみられる求心型、放射状の閉じた交通網ではなく、東京湾に新しい都市軸を建設し、線型の開いた系に移し替えることを提案した。

ションを得たという。その方法は、日本の近代建築確立に取り組み、茶室の研究を続けた堀口捨己や、数寄屋の近代化を試みた吉田五十八とも異なる。丹下は、広島計画を通して「近代建築における伝統は（中略）建築家の実践が創造してゆくものである」（「現在日本において近代建築をいかに理解するか」一九五五）と語り、伝統を大胆に推し進めるという積極的な姿勢をもつことで、はじめて伝統を創造的に継承することができると述べる。香川県庁舎（一九五八）では庇と縁を張り出し、さらに伝統建築の木割を想起させる柱と梁によって立面を構成している。

また、一九五四（昭和二九）年に来日して桂離宮などを見学したワルター・グロピウスの、日本建築にはバウハウスが追求してきた近代建築のすべてがある、といった発言などにも刺激され、伝統的建築を再評価する声が高まっていった。簡明な意匠、構造と表現の一致、自然との調和などが価値づけられていったのである。評価された伝統の多くは数寄屋に通じる弥生的なものであったが、そのな

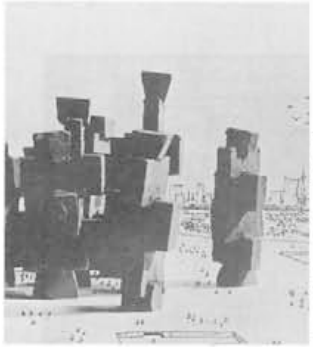


海上都市◇菊竹清訓、1958年[9]
人口増加、土地不足による社会的な不安感を解消し、生活設備、交通手段などの都市環境と自然環境を共存させることを提案している。

かで白井晟一（一九〇五～八三）は一九五六（昭和三一）年に、伊豆の民家・江川邸を取り上げ「縄文的なるもの」（一九五六）を書き、民家につながるたくましい骨太の建築、荒々しい架構などを評価して伝統の幅を広げ、松井田町役場（一九五五）などをつくっていく。

東京オリンピックの開かれた施設

日本経済は、一九五〇年代から六〇年代にかけて飛躍的に成長した。一九六〇年代は、日本が経済大国への道を邁進していった時代で、一九六八（昭和四三）年にはGNPが西側諸国でアメリカについで第二位となっている。このような時代を背景にして一九六四（昭和三九）年に東京オリンピックが開催された。



群造形◇大高正人＋槇文彦、1960年[10]
マスタープランでなく、プログラムに対応した空間像、生き生きとした美しい造形こそこれからの都市デザインであると主張している。

オリンピック施設の建設では、高速道路を含めた都市計画の推進、緑地が与える視線の変化などアーバン・デザインの意識、土木や造園など他分野との協力など、新しい試みが行われている。代表的な施設に、高山英華（一九一〇～九九）による配置計画、芦原義信と村田政真（一九〇六～八七）が外部空間と施設を設計した駒沢オリンピック公園や、丹下健三設計の国立屋内総合競技場・付属体育館などがある。

なかでも国立屋内総合競技場・付属体育館は注目を集めた。巨大な内部空間を必要とするために吊り構造が採用されたが、そこで丹下が考えたことは、機能、技術、表現の統合と、「開かれた空間」という概念である。開かれた空間とは、主体育館と付属体育館の関係、さらに将来の成長・変化に対応した空間をつくることで、「道、道の建築、広場」といった手立てを導入することで、彼はその回答を見いだしている。一九六一（昭和三六）年に発表した「東京計画一九六〇」で丹下は、成長と変化の機構を組み込んだ求心型の都市構造から、線型構造に改革した「都市軸」という概念を提案しているが、ここでもその考え方が応用された。

機能、技術、表現を一体化した建築をつくる考え方は、CIAMが推し進めて

ニュー・スコットランド・ヤード◇R. N. ショー、1890年、ロンドン（イギリス）[5]
ロンドン警視庁の建物。中世の城のスタイルやバロックなど、さまざまなスタイルを自在に組み合わせ、石と煉瓦が巧みに用いられている。いわゆるフリー・スタイルの代表的作品。

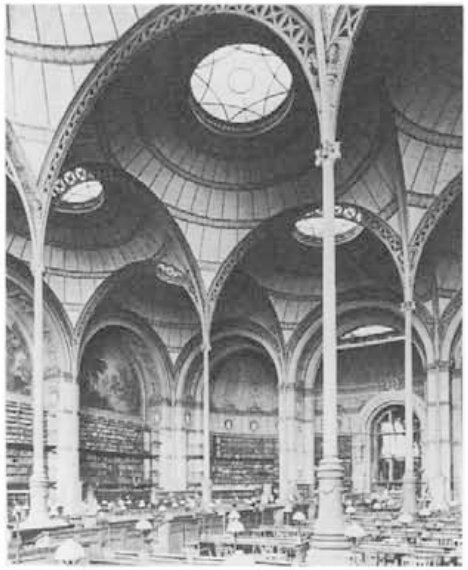
パリの東駅◇F. デュケネー、1852年、パリ（フランス）[6]
要壁を見せた中央のホールを、左右の二つの棟で挟む形式をもつ。のちのヨーロッパ各地の駅舎のモデルとなった。中央の大きなアーチが鉄の架構の存在を示す。

さかのぼるけれども、柱や梁などの主要構造材料としての鉄の使用は、一九世紀の半ば以降のことである。エッフェル塔（一八八九）は、その鉄による構築技術のすみやかな結実をいまに伝えている。また、ガラスの使用も古代にまでさかのぼり、中世のゴシック大聖堂のステンドグラスはガラスが大量かつ効果的に使われた例でもあるわけだが、無色透明の板ガラスが量産されるのは、やはり一九世紀以降のことである。

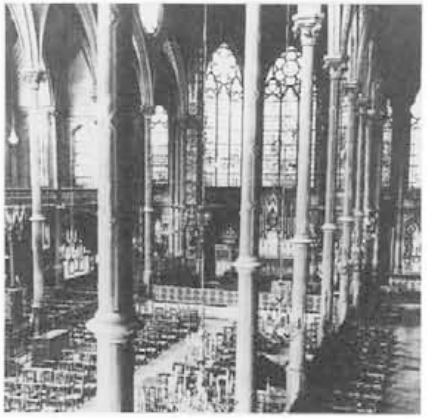
一八五一年のロンドン万国博覧会のクリスタル・パレスや一八八九年のパリの万国博覧会の機械館をはじめ、鉄とガラスの構築物が博覧会の主要パヴィリオンや鉄道駅舎や市場などに次々と現れたが、そうした光のあふれる軽快で広大な空間は、この新材料によってのみ可能だったのである。

鉄とガラスに比べれば、一九世紀の建築におけるコンクリートの使用は限定的で、階段や床スラブの一部に導入されたにすぎず、その本格的な使用は二〇世紀を待たねばならないから、鉄筋コンクリートはむしろ二〇世紀の材料といえるだ

パリの中央市場◇V. バルタール、1870年、パリ（フランス）[8]
鉄とガラスで架構された14のパヴィリオンが87,790㎡を覆う。のちの市場のモデルとなった。フェリックス・カレが協力。バルタール自身は保守的な建築家であり、鉄とガラスの使用は時のセーヌ県知事オースマンの要望に応えたものという。



パリの国立図書館◇H. ラブルースト、1875年、パリ（フランス）[7]
9個のトップライトを4列4行、16本の細い鉄柱が支える。鉄とガラスとクラシシズムの精妙な融合。図書館建築への鉄の採用は、火災防止の意味もあった。



サン・トゥジェーヌ聖堂◇L. A. ボワロー、1855年、パリ（フランス）[9]
スタイルは内外観ともまったくのゴシックであるが、鋳鉄の柱を使った最初期の教会堂建築。ヴィオレ＝ル＝デュクは、この作品によって鉄の使用の可能性を知ったという。ボワローは独学の建築家。

ろう。しかし、今世紀における鉄筋コンクリートの波及は一九世紀の経験があってこそである。

こうした新材料の使用とともに、一九世紀は従来マイナーな材料とされてきた煉瓦や木材にも新しい意味を与えて積極的に使用しており、この世紀は従来の石造優位の呪縛から意識的に抜け出した時代といえる。ロンドンのニュー・スコットランド・ヤード（一八九〇）やアムステルダムのレイクス・ムセーム（一八八五）などにおける多様な色彩とテクスチャーをもつ煉瓦の盛んな使用が、ポリクロミー（多彩色）の美意識の産物であると同時に、その美意識の普及を促進したことも確かであろう。

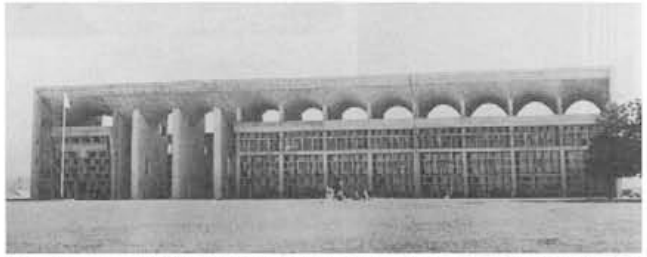
多様な用途の建築の出現

つぎに、一九世紀には新しいビルディング・タイプ（用途別の建築種類）がたくさん出現したが、これに一応の回答が与えられたこと。すなわち、一八世紀までの記念碑的な建築の歴史は、ほぼ聖堂と宮殿に限られていたが、一九世紀はこれに加えて、官庁・裁判所・刑務所、美

V 加速度化する潮流……❷

モダニズムの戦後の展開

ユニテ・ダビタシオン◇ル・コルビュジエ、1952年、マルセイユ（フランス）[1]
一つの都市としての集合住宅、ユニテ・ダビタシオンの最初の実現。この後、ルゼ＝レ＝ナント（ロワール＝アトランティク県、1953）、ベルリン（ドイツ、1958）、ブリエ＝アン＝フォレ（ムルト＝エ＝モゼル県、1957）、フィルミニー（ロワール県、1969）の4つが実現した。



チャンディガールの州政府庁舎◇ル・コルビュジエ、1963年、チャンディガール（インド）[2]
チャンディガールはヒマラヤの麓の都市で、パンジャブ州の首都。その都市計画が1950年末にル・コルビュジエに委託された。この写真は裁判所の建物。

モダニズムの成熟

モダニズムの建築は、一九二〇年代にはすでに完成された姿を示してはいたが、直線的に波及していったわけではなく、アール・デコや古典主義的なスタイルの建築などと並行して発展していく。また、第二次世界大戦前までのモダニズムはなお前衛であり、一部のいわゆる先進国で行われていたにすぎなかった。したがって、モダニズムが真の普及をみるのは戦後のことであり、モダニズムは戦後にはじめて、文字どおりインターナショナルなスタイルとなるのである。

しかし、それと同時にモダニズムもその前衛性をやわらげ、成熟をとげていく。すなわち、あまりにも禁欲的・排他的な姿勢に見直しが行われ、直線と平面のみによる硬直した造形に曲面を駆使した造形が加えられ、またなめらかで一様な表面にも手が加えられて荒々しい材質

スポーツ・小パレス◇P. L. ネルヴィ、1957年、ローマ（イタリア）[4]
1960年のローマ・オリンピックの会場の一つ。ネルヴィは同様な手法で、もう一まわり大きなスポーツ・パレス（1959）も建てている。

ノートル・ダム・デュ・オ聖堂◇ル・コルビュジエ、1955年、オート＝サオ＝ヌ県ロンシャン（フランス）[3]
そのシンボリックな造形によって、ル・コルビュジエの作品中もっともポピュラーな作品となった。と同時にもっとも多く論じられた作品でもある。

ラ・トゥーレットの修道院◇ル・コルビュジエ、1959年、ローヌ県エヴー＝スュル＝アルブレル（フランス）[5]
ドメニコ会修道院の建築。ロンシャンと並ぶル・コルビュジエ後期の代表作。独特な採光法が用いられている。

感をもつ作品も現れることになる。さらに、モダニズムがまったく無視した地方的伝統も加味されていく。要するに、戦後はモダニズムの建築の普及と成熟として出発するのである。

戦後のル・コルビュジエ

戦前のモダニズムを先導したル・コルビュジエは、戦後もまた独特の彫塑的な造形で大きな影響を与え続けることになる。

まず、マルセイユのユニテ・ダビタシオン（一九五二）。これは、その名の「住居単位」が意味するように一棟の集合住宅であるが、二三の違ったタイプの約四〇〇戸からなるそれは巨大で、ピロティの上にのせられた巨大客船のようであった。

そしてそのピロティは、戦前の彼の作品に見られる単なる支柱と違って表面は荒々しく、しかも彫塑的な形をもっていた。同様に彫塑的な形は、屋上の換気筒やオブジェにも見られ、全体として異様に力強い造形性をもつシンボリックな姿を示すことになった。なお、ユニテ・ダ